

夢追い人列伝

その十 「佐藤英雄伝」

初めに

令和4年4月に公立化されて周南公立大学となった徳山大学が開学したのは、今から50年以上前の昭和46年のことである。佐藤英雄氏は、開学間もない徳山大学に赴任し、ゼロからチームを作り上げた。山口県バスケットボール協会が創立された昭和30年代から、山口県の学生バスケットは、山口大学を中心に展開してきたが、佐藤氏は敢然と立ち向かい、男女のバスケットボール部を合計31回インカレに導き、一時代を築き上げた。夢追い人伝第10回は、その佐藤氏の足跡を追う。

佐藤 英雄（さとう ひでお）

昭和27年10月生まれ・山口県周南市在住

大東文化大学卒業

一般社団法人山口県バスケットボール協会 副会長

元徳山大学教授（平成30年3月退官）



1 きっかけ

佐藤氏は、福岡県北九州市の生まれである。中学校でバスケットボールを始めたが、野球もバスケットと同じくらい好きで、門司工業高校（現・豊国学園高校）に進学したときは野球部に入った。その後、バスケット部顧問から強く誘われ、転部した。強豪校ではなかったが、以来バスケ一色の高校生活を過ごすことになる。大学は、大東文化大学に進学した。佐藤氏はバスケット部の4期生である。今でこそ強豪校として名を馳せているが、佐藤氏が入学したときはまだ関東学生リーグの4部Aの所属だった。その後毎年昇格し、4年次には2部Bだった。ちなみに、元国際審判の小池正夫氏は同学年である。佐藤氏は早大生で学生審判をしていた小池氏にゲームを吹いてもらったことを覚えている。後に、山口教員団と一緒にプレーすることになるとは、想像だにできなかった。

関門海峡を挟んで山口県と隣接している北九州市出身の佐藤氏であるが、もともと山口県や徳山大学に縁があったわけではない。佐藤氏と徳山大学を結びつけたのは、当時、徳山大学の法人本部長だった田島侃光氏^{ただひこ}である。田島氏は大学スポーツのエキスパートであり、強化に関わった部は、亜細亜大野球部、大東文化大陸上競技部など枚挙にいとまがない。徳山大学にもスポーツ強化のために招かれていた。

田島氏に誘われるまま、大学卒業と同時に徳山大学に奉職した。佐藤氏は、田島氏から大学スポーツとは、また指導者とは等、様々なことを学んだと言う。

2 創成期

徳山大学は、昭和46年に定員200名の経済学部の単科大学としてスタートした。開学から4年後の昭和50年に、大東文化大学を卒業したばかりの佐藤英雄氏がやってきた。

今でこそ周南市には新幹線と山陽自動車道が通り、大学周辺にもにぎやかだが、当時、山陽新幹線は岡山までしかなく、高速道路は山中を走る中国縦貫道だけだった。大学の施設もまだまだそろっておらず、体育館もなかった。タクシーで「徳山大学まで」と告げると、運転手から「どこにあるんですか」と聞き返されたこともある。最近人気のテレビ番

組ではないが「山の中にポツンとある寂しい大学」だったと、佐藤氏は語る。

バスケットボール部は、開学当初からあったが、佐藤氏が赴任するまでは、指導者もおらず、同好会のようなものであった。佐藤氏は、着任と同時に男子バスケットボール部の監督となった。

徳山大学では、運動部に力を入れており、硬式野球部、レスリング部、空手部などが全国大会で活躍し始めていた。佐藤氏も、野球部の外野のノックを買って出て手伝った。どの部も関係ない。とにかく大学を挙げて盛り上げていこうという機運に溢れていた時代だった。大学教職員の草野球チームもあり、高校訪問には皆で行き、教職員間で交流を深めたりした。

バスケット部の話に戻そう。当時、体育館はなく、グラウンドの砂場の近くにリングが1対あるのみであった。練習は必然的にほとんど屋外で、週末に高校生や実業団との合同練習を行ったり、近くの体育館を借りたりしながらの活動であった。選手も集まらず弱いチームだったが、県内の学生リーグ、中国学生選手権、西日本学生選手権や三地区（九州・中国・四国）学生選手権など、出場できる大会にはすべて出場した。

昭和52年に、ようやく室内にリングを置くことができた。ただし、正規の体育館ではなく、ハーフコートで、天井の高さが4mくらいしかない。ループをかけたジャンプシュートは打てなかった。昭和56年に待望の体育館ができた。開学10周年を記念して建てられたので「記念館」という名前が付けられている。ようやく本格的な練習に取り組むことができるようになった。

中国地区の男子学生は、平成の初めまで五県の国立大学が覇を競っていた。当時、中国地区の枠が1だったインカレ出場校も、第1回（昭和24年）から第44回（平成4年）まで国立大学が占めている。唯一の例外が第23回と24回の広工大であった。県内の学生リーグも、山口大学本部、工学部、医学部の3チームが上位を争う時代が長く続いていた。

徳山大学は次第に力を伸ばしていき、昭和63年と平成元年には秋の中国学生選手権（インカレ予選）で、2年連続ベスト4になった。ただ、その先のあと一步が遠かった。県内では、平成3年の県学生リーグ優勝の記録があるが、これ以前の記録が残っていないため、初優勝であったかどうかは定かでない。

平成元年入学の西田直之氏は、「部員も少なかったもので、佐藤先生はスクリメージに自ら入って練習相手となることもありましたが、3ポイントは、学生の誰よりも確率が高かったです。あまり教え過ぎず選手に考えさせるコーチングだったと思います。このことで、自主性や自立心、チームに対する自己犠牲の精神や協調性が育まれました。バスケットにとどまらず、社会人としての人間形成に繋がっていたと思います」と、感謝の念を述べている。ちなみに、西田氏は「佐藤監督」のラストゲームの審判を務めた。

3 短大と女子部の躍進

そんな中、学生部長佐原昌弘氏（現・周南市社会福祉協議会会長）から、「今度、女子の短大ができるから、女子のチームを指導してみないか」という話が舞い込んできた。佐藤氏は、それまで女子の指導は経験がなく、しかも男子チームで結果が出せていない中、女子の指導を引き受けていいものか、相当悩んだ。しかし他に適任者も見当たらず、結局引き受けることにした。こうして、男女2チーム同時の監督業が始まった。昭和62年のことだった。

県内の高校から8名の選手を集め、入学前から練習を始めた。佐藤氏は、中谷康代氏（旧姓・上田）に外部コーチとして協力を仰ぎながら、不慣れな女子の指導に取り組ん

だ。能力の高くない彼女達の良いところを伸ばしてやろうと、張り切って鍛えた――。張り切りすぎてしまった。入学式を前に、8名全員が「部活を辞めたい」と言いに来たのである。佐藤氏は、選手一人ひとりと面談し、納得するまで話をした。そして、「8人全員でインカレを狙おう。卒業までに絶対連れて行ってやる」と約束した。

そこから、改めて猛練習が始まった。導入されたばかりの3ポイントシュートの練習には特に力を入れた（3ポイントシュートは、昭和60年に導入された。当時の3ポイントラインの距離は現在より60cm短い6.25mであった。）

短大のデビュー戦となった春の中国学生大会は、初戦で岡山県立短大に敗戦。6月に行われた西日本学生選手権では4回戦まで進み、弾みをつけて臨んだ初めての秋のインカレ予選。2回戦から登場した徳山女子短大は、ノートルダム清心女子大を88-48のスコアで下し、幸先良いスタートを切ったものの、3回戦（準決勝）で強豪・島根大に77-80のスコアで惜敗した。

昭和63年。チームは新入生1人を加えて9人となった。すっかり逞しくなった徳山女子短大は、春の中国学生大会で、準決勝で島根大に、決勝で岡山県立短大に雪辱を果たし、優勝を飾った。そして、秋のインカレ予選。決勝まで安定した戦いを貫き、遂に優勝してインカレの切符を手に入れた。決勝のスコアは、岡山県立短大を相手に91-69。91点のうち、実に60点が3ポイントであった。猛練習の成果であった。佐藤氏は、インカレに連れて行ってやるという約束がウソにならずに済んだと、内心ホッとしたという。当時の学生達とは、今でも「先生、鬼でしたね」「いや、愛情だったんだよ」と辛かった練習の思い出話に花が咲く。

11月に大阪で行われた第35回全日本学生女子選手権大会が、佐藤氏にとって、そして山口県の大学女子チームにとっても、初めてのインカレの舞台だった。結果は初戦で日本

女子体育大学相手に37-105のトリプルスコア。関東のインカレ常連校の強烈な洗礼を浴びた結果となったが、確実に刻まれた第一歩であった。

短大バスケット部の実質的な活動は、ここで終わっている。県協会60年史「夢を追う」資料編には、平成8年の山口県学生秋季大会まで徳山女子短大の記録が残されているが、平成2年には徳山大学に女子チームが作られ、佐藤氏は指導の軸足を短大から大学へ移していた。なお、徳山短大自体も、平成16年3月に大学に福祉情報学部が新設されたことに伴い、発展的に閉校している。

全日本大学選手権の記録(1988年～2019年)

年	男子		女子	
1988 (S63)			第35回	徳山女短37-105日女体大
1989 (H1)				
1990 (H2)				
1991 (H3)				
1992 (H4)			第39回	徳山大53-71東女体大
1993 (H5)			第40回	徳山大59-83専修大
1994 (H6)			第41回	徳山大31-108愛知学泉大
1995 (H7)				
1996 (H8)			第43回	徳山大63-64筑波大
1997 (H9)			第44回	徳山大57-89大阪薫英女子短大
1998 (H10)			第45回	徳山大71-58拓殖大 徳山大69-72桜花学園大
1999 (H11)			第46回	徳山大57-82鹿屋体育大
2000 (H12)			第47回	徳山大67-63園田学園女大 徳山大59-88東北学院大
2001 (H13)			第48回	徳山大73-74埼玉大
2002 (H14)			第49回	徳山大117-47長野経短大 徳山大55-74薫英女短大
2003 (H15)	第55回	徳山大76-81酪農学園大	第50回	徳山大65-82玉川大
2004 (H16)	第56回	徳山大51-102大東文化大	第51回	徳山大52-115筑波大
2005 (H17)	第57回	徳山大68-74拓殖大		
2006 (H18)	第58回	徳山大68-73大阪学院大	第53回	徳山大57-87山形大
2007 (H19)	第59回	徳山大65-107専修大	第54回	徳山大37-93日女体大
2008 (H20)			第60回	徳山大59-97専修大
2009 (H21)	第61回	徳山大77-105専修大	※ 第60回から男子と回数を合わせた	
2010 (H22)	第62回	徳山大79-121慶応大		
2011 (H23)	第63回	徳山大49-101専修大		
2012 (H24)	第64回	徳山大62-99近畿大		
2013 (H25)			第65回	(山口県開催)
2014 (H26)	第66回	(山口大58-102国士館大)		
2015 (H27)	第67回	徳山大54-111筑波大		
2016 (H28)	第68回	徳山大62-79日本大		
2017 (H29)	第69回	徳山大68-92白鷗大		
2018 (H30)	第70回	徳山大52-83近畿大		
2019 (R1)	第71回	徳山大57-85日本大		

監督に就任した頃は、まだ何の実績もなく、どこの高校に行っても相手にしてもらえずに苦勞した選手集めだが、徐々に指導者とのパイプができはじめ、また教え子も各地で教員となり、県内外のネットワークが形成され、次第に軌道に乗ってきた。

設立3年目の平成4年から徳山大学女子の快進撃が始まる。平成4年から平成16年まで、実に13回連続インカレ出場である。さらに1年おき、平成18年から平成20年まで3年連続出場している。短大の1回を含め、佐藤氏は女子チームを17回もインカレに導いている。しかし、関東、関西、東海の大学の高い壁にはじき返され、勝利は遠かった。

一番印象に残っているのは、平成8年の第43回インカレである。相手は、関東2位の筑波大学。会場は、東京代々木第2体育館。徳山大学は大接戦を演じ、残り1分まで63-62でリードしていた。その後、逆転を許し、63-64。徳山大学の最後のオフェンスで放ったシュートがリングをぐるりと一周して落ちて、タイムアップ。今思い出しても悔しさが蘇る。ただ、地方の大学が関東2位に勝つかもしいないと、代々木第2体育館が「徳山大学がんばれ！」の声援で溢れた。あの雰囲気は忘れられないと興奮気味に語る。

この2年後には、1回戦で拓殖大（関東11位）を破り、続く2回戦でも桜花学園大（東海2位）に69-82と善戦するなど、着実に結果を残していった。

平成18年入学の山崎敬子氏（旧姓・市川）は、学年で部員が一人だけだったので、4年で必然的にキャプテンとなった。チームを引っ張っていくことに大きな不安があったが、佐藤氏が相談相手になってくれたおかげで重責を担うことができたと言語。だから、自分にとっては、佐藤氏は、感謝してもしきれない恩師であると同時に、よきチームメイトのようでもあったという。岩国から電車で通っていた山崎氏は、当時防府市の高校に通っていたお嬢さんを櫛ヶ浜駅まで迎えに行く佐藤氏の車に同乗して、ちゃっかり駅まで送ってもらっていた。「普通ならできないけど、佐藤先生だからこそ遠慮せずに乗せてもらいました。とてもありがたかったです」と感謝している。



平成20年女子部インカレ予選優勝(山崎敬子氏提供)

4 男子部の隆盛

女子部に先を越された格好の男子部であったが、21世紀に入った平成13年からは、県内大学トップの地位を維持している。そして、平成15年、中国学生選手権で優勝し、ついにインカレ初出場を果たした。しかも中国学生準優勝の女子部とのアベック出場であった。こののち、平成16年、18年、19年にアベック出場を果たしている。

女子部のインカレ連続出場は平成20年で途絶えたが、入れ替わるように男子部が力をつけ、インカレの常連校となった。平成15年から、佐藤氏がベンチに入った最後の年の令和元年までに、実に14回もインカレに出場している。ただ、男子部は、インカレの舞台で勝利を上げることができなかつた。全国の壁は、女子以上に高かつた。佐藤氏は、68対74の6点差で敗れた平成17年の拓殖大戦が一番チャンスだったと悔しがる。

男子部には、平成15年から長身の留学生選手も導入された。ただ、それだけで勝てるほど甘くはない。インカレ出場の実績を積み上げることができたのは、県内外の運動能力のある選手を地道に集め、強化してきた成果であると言える。ところが、中にはやんちゃな学生もいた。学生のコート内外での不適切な言動のために大会の参加辞退を余儀なくされ、中国学生リーグや県学生リーグで2部降格の憂き目に遭ったことが2度もあった。中

国学生連盟理事長の立場にあった佐藤氏は、断腸の思いであったに違いない。

5 教員団と国体

佐藤氏は、自身も山口教員団でプレーをしていた。昭和 57 年に桑原英雄氏の後を継いで教員団の監督に就いた。同時に国体成年男子の監督にも就いた。昭和 58 年にはミニ国体を突破して群馬国体に出場している。当時の国体チームは、教員団が中心で、そこに実業団の選手や学生を補強する構成だったので、自然な流れではあったが、教員団、国体、そして徳山大学と、3つのチームの掛け持ちはしんどかったと言う。教員団でも国体でも佐藤監督のもとで活躍した西村修氏（県協会常務理事）は、「自分が広瀬高校に勤めていた頃で、安下庄高校に勤めていた原守彦さん（故人）と一緒に、試合や練習のたびに佐藤先生のご自宅に泊めてもらった。お酒も沢山ごちそうになり大変お世話になったが、今思えばご家族には迷惑でしかなかったことであろう。申し訳ない。ベンチでは、ゲームの流れを見てここぞというところでタイムアウトを取り、プレーヤーに考えさせる。そのタイミングは絶妙だった。」と語る。

成年男子の監督を5年務めた後、昭和 62 年からは引き続き成年女子の監督となった。女子代表を東京オリンピックで銀メダルに導いた翌年に男子代表のヘッドコーチとなったトム・ホーバス氏と逆のことを、30 以上前に実践いたのである。成年女子の監督は、平成 11 年までの 13 年間務めている。着任した昭和 62 年の沖縄国体では5位に入賞した。徳山大学と国体チームの歯車がかみ合い、相乗効果をもたらせた。国体では「四天王」と呼ばれた上田・木下・佐々木・小城の四選手が活躍した時代と重なっている。工藤博美氏（旧姓・木下）に佐藤氏の話を知ると、出てくるのは楽しくお酒を飲んだ思い出ばかりだった。人心掌握術に長けた佐藤氏ならでは、ということであろう。



教員団時代(桑原英雄氏提供)



北海道国体(平成元年)

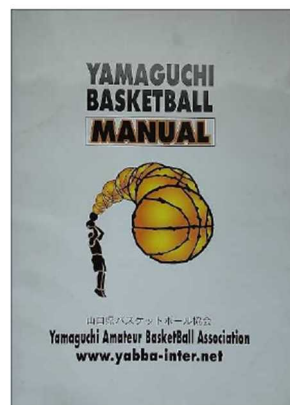
5 好きだからこそ

男女合わせて 31 回のインカレ出場は、驚異的な数字である。西日本学生選手権や三地区（中四国九州）学生選手権でも度々好成績を残している。他にも、中国総合選手権を制してオールジャパンに出場したことが、男女1回ずつある。男女のゲームが交互にあり一日中ベンチに座り続けることは日常茶飯事だった。

しかし、佐藤氏は自チームの強化だけが眼中にあったのではない。山口県と中国地区の大学バスケットの振興にも力を注いだ。平成3年から山口県学生バスケットボール連盟理事長、翌平成4年からは中国大学バスケットボール連盟理事長に就任し、平成30年に大学を退官するまで、実に30年近くも務めた。平成21年から始まった中国大学新人大会は、第1回から第11回（令和元年）まで周南市で開催を引き受けた。平成16年からは、全日本大学バスケットボール連盟常任理事の要職にも就いている。

平成 25 年、女子インカレが麒麟ビバレッジ周南総合スポーツセンターで開催された。インカレが小さな地方都市で開催されることは、本当に異例なことである。これも、佐藤氏の功績をたたえてのことであろう。ただ、徳山大学はこのインカレに出場できていない。「地元出場枠」は山口県ではなく中国ブロックに与えられており、徳山大学は、中国予選で出場枠の 3 位以内に入れなかったのである。佐藤氏は大会の準備と運営に追われ、部員も補助員として参加するしかなかった。この話になると「出んにゃいけんかったですね・・・」と、今さらながらに悔しがった。

大学にとどまらず、県全体の強化にも力を注いだ。平成 13 年 2 月に、山口県バスケットボール協会は「山口バスケットボール指導マニュアル」を、指導実践のビデオと併せて刊行している。まだ公認コーチの資格制度のない時代に、バスケットの強化、普及の着実な進展に寄与し、ミニ・中学・高校の一貫指導体制の構築を目標とした、野心的な試みであった。その編集の中心を、担ったのが佐藤氏である。日本協会の公認コーチ制度がスタートしてからは、学生にも資格取得を推奨し、その普及に努めた。



山口バスケットボール指導マニュアル

ここで、三嶋隆史氏について触れておく。三嶋氏は、徳山大学の事務方として、最後は法人本部長を務められた。業務の傍ら、チームのコーチとして、また学生連盟の事務局長として、超多忙な佐藤氏を支えてきた。まさに、佐藤氏の右腕であった。三嶋氏を抜きに佐藤氏の歴史は語れないのである。実は、三嶋氏は佐藤氏が徳山大学に赴任したときのバスケットボール部のキャプテンである。三嶋氏は、佐藤氏との出会いを次のように語り懐かしんだ。

徳山大学 3 期生の私が 3 年生最後の春休みの夕方、グラウンドの隅にあるバスケットボールコートで一人シューティングをしていた時、夕日をバックに、背が高く痩せぎすの男性がコートにやって来て、突然「今度、バスケットボールのコーチをする佐藤です」と挨拶をされたことを覚えています。当時、今の姿からは想像できないほどやせていました。

あまり知られていないが、佐藤氏は知的障害者のバスケットボールにも関わりが深い。周南養護学校（現・周南総合支援学校）の校長だった三輪研一郎氏や障がい者スポーツのけん引者だった三枝啓巳氏との縁で、平成 18 年に徳山大学体育館を会場に、第 1 回山口県 FID バスケットボール交流大会が開催された。以来、令和 4 年の第 17 回まで同会場で行われ、補助員には徳山大学女子バスケット部員があたった。この大会は、学生にとっても障害者支援を実践的に学ぶ場として貴重であったと佐藤氏は語っている。山口県 FID バスケットボール連盟の小坂会長は、「県内の FID バスケットのチームが一堂に会して整った環境でゲームができる、ありがたい大会だった」と感謝を述べている。なお、第 18 回大会は別会場に移して行われた。

かくのごとく、佐藤氏のバスケットボールへの献身は多方面に渡る。その極意は、「継続」だそうである。好きだからこそ努力もチャレンジも続けてできる。好きだからこそ、50 年近くも続けてこられた。しかし、「言うは易く行うは難し」である。佐藤氏が積み

上げられてきたことには、改めて頭が下がる。

佐藤氏の功績に対して、平成 29 年に山口県体育協会功労賞、令和 3 年に山口県障害者スポーツ協会功労賞、そして令和 4 年に県知事から山口県スポーツ功労賞が授与された。

6 これから

佐藤氏は、大学を退官する少し前から男女のチームをそれぞれ若い指導者に託した。川瀬秀太氏に引き継がれた男子部は、インカレ出場を継続している。ところが、女子部は引き継ぎがうまくいかず、結局活動を停止してしまった。佐藤氏にとっては、無念と言うほかあるまい。男子部にしても、公立化により選手のスカウティングが難しくなったので、今後は戦力の維持が大きな課題となる。心配の種は尽きない。

実は周南公立大のことと同じくらい佐藤氏が憂えているのが、山口県の大学組織の今後である。コロナ禍で活動が停滞した期間が続いたことや、組織改編により県単位の大学連盟がブロック連盟に統合されるなどの事情が重なったこともあるが、佐藤氏と三嶋氏が大学の現場から去ると、県内の大学組織は瞬く間に崩壊してしまった。今後は、各大学の学生代表が集まり、自主的な運営組織を構築する必要があると、佐藤氏は訴える。

佐藤氏の人物像は、誰に聞いても「おおらか。物腰が柔らかい。面倒見が良く、他人の悪口を言わない。お酒が大好き」と返ってくる。人望の厚さがにじみ出ている。教え子からは、体型も相まって、トトロやムーミン、あるいは漫画スラムダンクの安西先生に例えられ、愛されてきた。

多くの時間とお金をバスケットに費やしたことを、佐藤氏はバスケットが好きだからこそ続けることができたと笑うが、ご家族の理解と支えがなければ、決してできることではない。徳山大学の栄光もなかったことだろう。二人のお嬢さんの育児も奥様に任せっきりだったが、愛情はたっぷり注いだと語る。御長女の結婚相手は、徳山大学バスケット部の卒業生、つまり自分の教え子である。お嬢さんから付き合っている相手を紹介されたとき、「お前か!」と、驚いた。実は、周りの人たちは皆知っていて、知らぬは親父ばかりなり、だった。いかにも佐藤氏らしいエピソードである。



平成30年男子部OB「退職激励会」(西田直之氏提供)

今は、ときどき看護学校の非常勤講師をしながら、「主夫」生活を送っている。長年苦勞をかけた奥方への恩返しである。近所に住むお孫さんの世話にも精を出している。以前、大好きなお酒が少し過ぎたか、体調をくずして入院されたこともある。山口県のバスケット界は、まだまだ佐藤氏の力を必要としている。どうか、健康第一で、ご家族を大切にしながら、これからも後進を見守り、導いていただきたい。

(文責：顕彰委員会)